

第3章

夕陽丘と私

【この章に出てくる犬と猫は、夕陽丘のペットたちです。】

夕陽丘で三十年

栗野誠治

私は米沢の桜木町で、昭和三年十月九日、栗野芳助、みつの次男として生まれた。地元の「興讓小学校」(藩校の名を継いだ名門小学校)に行っていたが、姉が結核になったので、父母は心配して、兄は東京荒川町屋の母の姉の所へ、私は鎌倉の新倉硝子店に奉公にだされた。兄は小学校を卒業していたが、私は四年を終わったときだった。

学校に行かせてくれるのが条件だったので、葉山の支店に回してくれ、葉山小学校に通うようになった。戦時中のことで、職人が応召され、人手が足りなくなり、六年生の時には、硝子を入れる仕事で忙しくなり、ほとんど学校に行けなかったが、卒業免状は貰った(昭和十六年)。その後、仕事は忙しかったが、これでいいのかといつも考えるようになった。

新倉硝子の社長は、大きい仕事を取ってきた。佐倉の城址に海軍が結

核療養所を作るガラス工事を請けたのだった。私は湘南で集めた職人の世話焼きとして、佐倉の農家の飯場で寝起きした。元請けは清水組で、設計者はアメリカ新帰朝の吉村順三さんだった。吉村さんは私が若くて知識に飢えているのを見て「新聞をよく読め。分かっても分からなくても本を読め」と教えられた。この一言が私の人生を変えた。職人や親方でなく自分を生かす道があると思った。

その翌年、昭和十九年には徴用で「横浜ゴム戸塚工場」に入って働かされた。二十年四月の空襲で工場は全焼し、私は歩いて上野まで行き「戦災証明書」のお陰で、なんとか超満員の汽車に乗って、両親のいる米沢に帰った。

米沢では、運良く土建屋の親方と知り合い、地下工場の建設の現場監督になった。朝鮮人を使う仕事だったが、皆を親切に扱ったので、終戦後も闇屋の仕事で便宜を図ってもらった。戦後は闇屋の仕事が面白く、持っていった食料はすぐにさばけ、帰りに石鹼とか衣料とか何でも売れる品物を買った。

しかし闇屋も先が見えてきたので、思い切って吉村先生を訪ねた。先

生は大変喜んでくださって早速、先生の兄さんが社長だった「銀座の越後屋」を紹介してくれた。二十歳の時である。

織維は初めてであったが、持ち前の負けじ魂で仕事もすぐ覚えたし、物さえあれば、売れた時代であった、ドレメに出入りするようになって、杉野繁一理事長とも知り合った。購買部を作る時にケースの中古を世話したりして信用を得た。

理事長の頼みで、昭和二十六年、両親を呼び寄せて住み込みの用務員に雇ってもらった。父は土族の誇りを持っていた真面目一方の人で、弟や妹と一緒に住めるのが利点だった。

私は越後屋の一室で暮らしていたが、昭和三十二年二月十一日(日曜)、江藤梅乃と結婚した。梅乃は福岡県出身で文化服装学院を出て、郷里で洋装店を開く目的で越後屋の洋装部に入っていた。

牧野健三さんとはドレメの隣の健三さんの店に入って話をしたことがきっかけで知り合った。それで親交会にも入り、ダンスパーティーで嶋田さんや田中稀一郎さんとも知り合った。稀一郎さんが勤めたNCRの事務所が越後屋の三階にあって顔を合わせた。

昭和三十三年に越後屋が事業を整理縮小したため退職して独立した。幸い日本橋堀留の大和銀行三階の一室に事務所を借りることが出来た。立地条件を生かして、直販とブローカーを併用し、現金主義の手堅い商売で、生活は質素にしたので、弟妹を一人前にし、昭和四十五年には両親の引退後の家を習志野市に作ることも出来た。これも家内の協力があつたからこそできたことで、本当に有難いことだった。

結婚して十カ月は五反田のアパートで暮らしたが、その翌年、家内はドレメの事務員として就職し、ドレメの社宅に入った。当時は生徒が増え、何かと一番忙しい時だった。平成二年に家内の退職とともに杉野三田苑に移り、平成十八年二月に父母亡き後の習志野の自宅に引っ越した。夕陽丘では賢人会や町会の総会で会合を楽しんだ。夕陽丘で暮らした三十年余りは、働き盛りで人生の最も充実した時であり、親切的な町会の皆さんに感謝しています。

皆さんに可愛がられ助けてもらった一生でした。

何といっても、こんなに長く居られたのは、岩沢英一理事長はじめ、ドレメの方々の御厚意の御蔭だと、いまさらながら思う日々です。

ナイル



「戦争日記」より

石原(旧姓・嶋田)洋子

〈昭和十九年〉

六月十六日

北九州が空襲された。アメリカがサイパン島に上陸を企て激戦中とのこと。小笠原の父島や硫黄島に敵機来襲とのこと。

六月十八日

警戒のサイレンが鳴る。

七月十八日

今日、サイパン島の守備部隊全員戦死の大本営発表あり。

八月四日

警戒のサイレンが鳴る。

警報が出ると、風呂桶やあらゆる入れ物に水を満たす。

十一月一日

ラジオを聞くと、京浜地区に大型機進入。アメリカの編隊が伊豆上空を通過、東京へ進行中とか、だんだん警報のサイレンが多くなる。

焼夷弾投下され、迎え撃つ高射砲の音が地響きして聞こえる。焼け出される家もあったとのこと。

十二月三十一日

昭和十九年の大晦日も除夜の鐘ならぬサイレンの音で暮れた。

〈昭和二十年〉

二月十六日

ラジオから敵小型機三十数機、房総方面より進入と報じている。小型機ならきつと艦載機だ。「房総方面の我が飛行場を攻撃中」「京浜地区へ向かった」「新たな敵編隊」等々。

空にはブンブンと飛び交う飛行機のうち、高射砲のズシンという音。空襲解除のサイレンが鳴っても波状攻撃をしてくるからとのこと、はたしてまた二、三十分してまた空襲。今日は一日中これを繰り返していた。

三月十日

B 29 百三十機が本土に初の夜間空襲があり、焼夷弾をたくさんバラまいたので、方々火災が起こり、空は赤く、煙がモクモクと上がっているのが見え、お向かいの家の壁や、お庭の残雪が赤く見える。

三月十一日

新聞によると、本所、深川、神田、城東、日本橋、浅草あたりが焼かれた。

お昼頃、父嶋田実が防空頭巾に身を固め、私宅に。他の親戚も無事とのこと。

三月十五日

弟・嶋田勇一が私宅に来てくれた。

五月二十四日

房総方面からの敵機進入。夜空が真っ赤になり、飛行機がクルクルと落ちてゆくのが見えた。

上大崎の方面が焼けたらしいとのことで、弟・嶋田勇一が自転車を借りて様子を見に行く。

父はまだ幼かった二人の子とも山形県へ疎開していて荷物が少し残っている程度だったが、家は応接間の天井に一発落ちて床に穴が空き、ドアが焦げていたそうだが、お向かいの鈴木さんが消し止めてくださったとのこと。そのほか、庭に四発も落ちていたとのこと。

お隣の田中さん、向かい隣の藤波さん、上の尾崎さん宅も焼けてしまったのに、空き家になっていた家が皆様のおかげでよく助かったものと感謝する。

弟が帰ってからの話では、新宿は通りが両側、四谷辺りまで、渋谷も何もないくらい焼けてしまって、とてもひどいとのこと。上大崎の家は今度も助かったが、二十三日の空襲では、焼け残っていた坂の上の高橋さん宅からずっと焼けているとのこと。

八月一日

弟・勇一入隊。隣組の方達と東中野駅まで見送りに行く。しかし、すぐ終戦になって外地に行く船もなく、軍隊毛布一枚をいただいて無事帰宅した。

八月十四日

正午に重大発表があるのでラジオを聞くようにとのこと。

八月十五日

米・英・ソ・重慶四ヶ国のポツダム宣言を受諾。戦争は終結。日本敗戦の日。ザーザーと雑音の入るラジオで天皇陛下の御声を聞いた。戦争は終わった。

〈昭和二十二年〉

一月八日

上野動物園に子ども達を連れて行く。

戦争中は「猛獣は逃げ出したら危険」ということで殺してしまったので、キリン、猿、豚、鹿、猪、マントヒヒ、それと鳥類しかいなかった。でも、平和になって子ども達の喜ぶ顔を見ることができたのは幸せであった。



四丁目の今昔

植木多恵子

私がこの四丁目の住人になったのは、女学校の一年生の時だったと思う。祖父母の家が現在の所にあり、移り住むようになったのです。当時の四丁目は閑静な住宅地で、行き交う人も稀といってよいくらいでした。山手線の目黒駅は今の駅からは想像もできないほど小さな田舎の駅舎といった感じでした。

行人坂の上からは晴れた日に秀麗な富士山を眺めることができました。目黒川では、今の亀の甲橋辺りで投網をしている人があり、名前の由来通り亀が甲羅干しをしていたり、セキレイが迂るように飛んでいました。

坂の途中、今の嶋田さん宅の南前は、目黒川に傾斜した雑木林で格好の遊び場で、弟達と柵をくぐり抜け遊んだりいたしました。

戦後はがらりと一変し、四丁目は駅に近い方半分ほどは焼け残り、陸

橋の上から、再開された両国の花火が微かに見え、また、多摩川の花火は坂の降り口からはよく見えました。今はビルが林立し、喜多能楽堂、ドレメ短大、大学等、人の往来もはげしく、四丁目はすっかり変わりましたが、それもまたよきかなと思う昨今です。

「アンセルモ教会」が根を下ろしたのは、もう五十数年も前のことです。当初は古い木造二階建の壊れそうな家で、歩くとミシミシと音がするような家でした。中には古いミシンが数台おいてあったのを記憶しています。この壊れそうな建物で数年礼拝をしておりました。そのうち徐々に信者も増えはじめ、これではいけないというので主任司祭をはじめ信者一同必死になって資金集めに奔走したものでした。その間にヒルデブラント神父の働きは本当に大変なものでした。当時を知る信者一同は感謝の一語です。

「ここ四丁目に根を下ろして布教をはじめのだから、ここの住民とは仲良くしていきたい」と常々口にしておられ、幼稚園やバザーで交流していました。

当時の神父様方は亡くなられ、アンセルモ教会も修道院の手を離れて

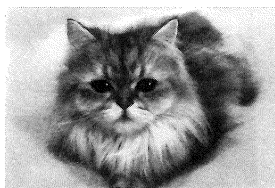
東京教区の管轄となるなど、随分と変わってしまいました。現在は多国籍教会のようです。

その他、思い出すままに……。

井戸、植木の家の庭に昔からあった井戸は埋めてしまいました。この辺は昔、熊本藩の下屋敷があったところで、そこに井戸掘りの名人がいて、その人の掘った井戸だそうです。涸れたことがなく、戦中戦後を通じて、ずいぶんと近所の方のお役にたったようです。高橋是賢邸のところでもその人が掘ったのですが、あまり良い水脈に当たらなかったと祖母から聞きました。

この辺の地盤は大変固く、地山だから地震の時にあわてて逃げない方がよいと、祖母が話していました。神戸や新潟のような大きな地震が来たら果たしてどうでしょうか。

富士山、行人坂降り口の銀行があった所から富士山が眺められたのですが、現在は高い建物にさえぎられ、頂上も冬の晴れた日に見られるだけで残念なことです。



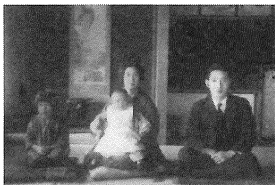
夕陽丘と私

奥村一郎

私が夕陽丘に来たのは一歳半のときだったようだ。それから約八十年、物心がついてからでも七十五年ほど経ってしまった。

大正十五年二月七日に新築の家の二階の客間で写した家族写真が残っている。この家は戦災で消滅したが、外観が西洋館で内部は和室もある和洋折衷の家であった。設計は父の妹婿の岡本庄治の金沢一中の同級生「和田順顕」であった。和田順顕は、岡田信一郎が美術学校の凶案科（建築意匠）の教授になって第一回の卒業生で、アメリカ帰りであった。

一階には居間と女中部屋が和室で、食堂、応接間が洋間、二階は客間、次の間が和室で、ダブルベッドの主寝室と子供の部屋には高いベッドと低いベッド、玄関の上の書生部屋の床もコルク張りだった。トイレは二階に洋式、下に和式の水洗だった。台所の下の地下室にはユンケルの口火の付いたボイラーがあり、玄関の錠はイエールのシリンダー錠で、外



新しい家（焼けた）に入った家族

から閉、内から開など操作できた。浄化槽はお巡りさんが毎月消毒薬を点検にきた。

王子製紙の若い社員から同社木材部の販売代理店になったばかりで、どうしてこんな豪勢な家が建てられたか。実は父は祖父から三万円借りたようだ。田舎地主の祖父は一人息子のために、田畑を処分して金を作ったらしい。ときどき祖父が来て、少しずつ集金したようだ。事業をするには信用が一番だから、家を立派にしたのだと思う。

私の幼い時の父は帰宅のとき、とても機嫌が悪く、そんな時は書生部屋に避難した。その原因が「ひっかかり」というものだと教わった。それで帰ってきた父に「パパひっかかったの」と言ったら父は苦笑いした。独立して直ぐ政府の震災手形の処理の失敗で大恐慌、ついで世界恐慌だったのだから、父の一番苦しい時だったらしい。

うちの南の向かいの家は若松さんで、二人の若い美人のお姉さんがいた。駅の方へ行く途中に左側に林さん、右側に福田さんがあった。林さんはポインター、福田さんはセッターを飼っていて、当時は人通りが少なかったので二匹ともおとなしく道で寝たりしていた。その二匹と仲良



奥村邸

くなったのが、犬好きになった元である。

林さんは、ドレメがうるさいと白金小学校の前に越した。その家を買って入ったのが今井田清徳氏であった。今井田清徳氏は朝鮮総督宇垣一成が首相に指名されたとき、宇垣一成の懐刀として組閣に関わったため、新聞記者が大勢来て、新聞に出た。

宇垣一成の組閣は、陸軍が陸軍大臣を出さず流産した。政党が苦勞してようやく獲得した軍部大臣非現役制を直前の広田弘毅内閣が簡単に元に戻したためだったが、当時の私にはよく分らなかったが、現代史のひとこまを垣間見たのだった。

養子に迎えられた研二郎氏（旧姓国塩）は名門旧制松本高校山岳部で北アルプス登攀に活躍した人で、後に日本山岳協会会長を務めた。その場所には現在「目黒パークマンション」が建っている。

林さんの向かいにあった福田さんの家は土地も広くて大きな木造のお屋敷で、門の中は車回しになっていたようだった。僕たちより二、三歳小さいかわいい坊やをちらっと見たが、早いうちに福田さんは引越し、家は壊されて空き地になったようだった。

小さいころは女中さんに「植物園」に連れて行ってもらった。茶店で三角のハトロン紙に入った塩豆を買ってもらって、鳩にやり、自分でも食べた。たぶんその頃は目黒川の護岸がなかったと思う。護岸ができてから川岸に沿ってテニスコートができたようだった。

私は昭和二十年一月十日に小平の陸軍經理学校に特別甲種幹部候補生として入隊するまでは、ここにいたのだが、驚くくらい近所との交際がなかった。町会長をやった嶋田君は白金小学校の一年下だが、戦後知り合ったくらいだ。

小学校時代に近所のお兄さんと遊ぶ機会があったのは不思議だ。名前も忘れたが、空気銃を撃たせてもらった人、空き地でラグビーボールで遊んでいる大学生らしい人の蹴った球を拾っているうちにボールを取ったり投げたり、パスなどを教えてくれた。友人の杉野利夫クンと一緒に、利夫クンが慶応中等部でラグビー部に入ったのもそのせいかもしれない。

その利夫クンはボクの記憶ができたときからいた。当時はまだ素人写真が普及していなかったため、二人の写真がないのが残念だ。

ボクは大正十三年生まれ、利夫くんは十四年早生まれで、ボクの方が少し年長であったので、悪戯の主導権はボクが持っていたようだ。

当時、お豆腐やさんは豆腐を二つの桶の水に入れて天秤棒で担ぎ、ラッパを吹いて回ってきた。幼稚園にも行かない前のこと、家の玄関の横に置いてあった桶の豆腐をかきまわして、それを泥と混ぜて利夫くんチの外壁にほうってくつつけた。外壁はデコボコしていて、よくくつついた。たちまち露見してボクは二階の納戸に閉じ込められて、なかなか出してもらえなかった。利夫くんはどうだったのだろうか。

二人とも体が弱くて仲良く一緒に病氣した。気候のよいときはうちの青桐の下で一緒に弁当を食べたが、おかゆの弁当を食べたこともある。

まわりは原っぱで、すかんぽやペンペン草など生えており、バッタ、カマキリ、カタツムリ、玉虫がいた。蝶々にはあまり興味をもたなかったが、空にいつぱいいたトンボを採ることに熱中した。シオカラ、アカトンボなどは珍しくなく、ヤンマ、オニヤンマは憧れの的だった。

一番熱中したのは、植物園につづく雅叙園になる前の崖を滑り降りることであった。近所の子供たちは戦争ゴッコなどやっていたようだが、

雉子神社例大祭に
町会代表として



それには目もくれず飽きもしないで朝から晩までやった。ビニールもダンボールもなく莫塵を使った覚えもないのでズボンが泥だらけになって、洗濯の女中さんに迷惑をかけたと思うが、それでも叱られなかった。二人は日の出幼稚園に入れられた。私はダンスとか唱歌とかお絵描きなどさっぱり興味がもてなかった。いつものように揃って病気になって治っても、二人とも幼稚園に行く気がせず、また崖にもどった。

崖といえば、興亜学院からドレメ短大になった土地が広い空き地で、大きな松があったが、東の崖の下は石垣で目蒲線が走っていた。その崖の上部はノリになっていて、ススキが一杯茂っていた。そのススキをしぼって上のほうを結んで小屋を作って遊んだ。女中さんが呼びに来ても隠れていた。暗くなつて帰ると早速白状させられて、小屋はとりこわされて、崖に行くのは厳禁された。

小学校は利夫クンは慶応幼稚舎へ、ボクは白金小学校と分かれたが、ボクの受験勉強が始まる前はよく遊んだ。

念願の空気銃を買ってもらって、植物園へ行く坂の街灯を撃って割ったり、空き家になっていた村井邸のガレージの二階のガラスを割ったり



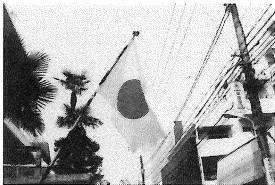
雅叙園ホテル前
ここで神主が御祓いをして下さる

した。紙を巻いて吹き矢の筒を作り矢の先にレコードの針をつけて、二階から向かいの鈴木さんの板塀めがけて発射した。パチンコを作ったかんにゃく玉を、ところかまわず鳴らした。

だんだんと遠くまで遠征し、日の丸自動車教習所が埋め立てたガマ池に行ったり、遠く呑川まで自転車で行ってオタマジャクシをバケツ一杯取ってきて死なせたりした。

一番遠くに行ったのは利夫クンの友達の大森山王のコモドリ君の所へ自転車で行った時だ。行きはなんとか行っただが、帰りに日が暮れて道が分からなくなり、職人さん風の人に聞くと、そちらに帰るからと、林業試験場の森の上まで親切に連れて行ってくれた。

利夫クンチの裏にあったドレメの教室はよい遊び場であった。待ち針や落ちていたものは何でも拾った。卒業パーティーの余興で校長の芳子ママが莫塵を被って出てきてビックリして、みな大笑いした。その自宅と教室を壊して三階建の校舎を岡田大工さんが建てる時は二人で足場に上ってハラハラさせた。



昭和二十年～三十年代のドレメ通り

奥村潤一郎

かたはらに秋ぐさの花かたるらく

ほろびしものはなつかしきかな 牧水

ドレメ通りのとば口の東側の銀行の元計算センターにはヤマト運輸の三越の配送センターがあり、アルバイトをしたことがある。その先は住友の保養所で、その後ゴルフの練習所だったこともある。紀の病院から目蒲線へ出られる坂道があり、剣サボテンが植えてあった。

西側の銀行の場所は、川崎さんの家作と竹島家と田中松雄さんの家(日本家屋で庭が素晴しかった)の跡である。その隣の野沢さんの家(古い壁掛けの箱型電話機あり)の玄関の柿の木が印象的だった。新宮殿の庭を設計した野沢清さんは子供好きでデイズニー映画に連れて行ってくれた(今の田中家は野沢さんの家の跡に移転した)。

その先のレデイスマンションの所は翠松閣という戦前からの風格の



あるアパートで、TVの「西部警察」のロケに使われた。ドレメの望雲寮は大川周明の屋敷だったそうだ。

通りの中ほどに進駐軍に接收された雅叙園観光ホテルがあり、クリスマスには近所の子供たちを招待してくれた。音楽のアトラクションがあり、七面鳥を初めて食べるなどご馳走してくれたが、被占領国民の気持ちの子供ながらチョッピリ味わった。また、ホテルの入り口にはベレー帽の絵かき風の人が、GIにポンチ絵ハンカチを売っていた。その人は韓国人だと言った。

そういえば、いつも木で作った車を押していた武藤さんという太鼓腹のおじさんが、火の用心の拍子木をたたいて夜回りをしていた。金魚屋、さお竹屋の引き売り、獅子舞、万歳、ゴム紐の押し売りなどがいた。

東側の南目黒苑は、牧野さんの焼け跡に稲葉さんが家を建てた跡であり、セレニティマンションは絵描きの牧野さんの家の跡でマンションの建築中にマンシが出たとのこと。学校の宿題でマンションの塀に登って花房山からのぼる日の出を見たことがある。

私の家の南の道は西に入り南に折れている。家の前は日系米軍人の家

で、ゴクちゃんという子供と遊び、TVも早くからあり、力道山とシャープ兄弟のプロレスの試合を見せてもらった。その家に能の喜多六平太さんが住み、娘さんが食品を製造しているらしく煙突から絶えず煙が出ていた。

その西、研究棟の所に甘納豆工場があり、その後、ドレメの校舎建設が盛んとなって、請負の小俣組の飯場があった。子供がいたので遊びに行つたが今と違い本当にお粗末なものだった。

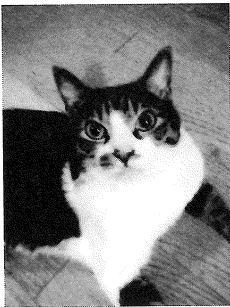
突き当たりの柵山さんのマンションは、モアさんという米軍人の家で、子馬ほどのグレイハウンドがいて、人が通ると吠えて怖かった。博広社のところも長く焼け跡で、柵山さんの所には滝ゆりこちゃんという賢い女の子がいて、ぐみの木を教えてくれて実を食べた。奥の行き止まりには山崎さん東條さんの家があり、畑もあり、肥溜めに落ちてうんがついた子供もいた。

ドレメ通りに戻ると、西の杉野大学の所はドレメの社宅で、広場があり池にはオタマジャクシがいた。東の短大には大きな椎の木があり実を炒って食べたりした。

目黒川に向かって坂を下って右に入ると奥に雅叙園のオーナーの細川さんの家があり庭から雅叙園によく遊びに行った。本宅の焼け跡に七福神の石像や動物の檻の焼けたのがあった。戦後も別の場所の檻で月の輪熊を飼っていた。当時は他人の家や庭に入っても怒られないノンビリした時代だった。

坂下の分譲地にはお宮があり、長いこと売れなかったので風揚げが出来た。目蒲線の線路に釘をおいて轆かして平たくしたり、国鉄の線路と貨物線との間の水路でザリガニを捕ったりした。子供の頃からの竹馬の友は、佐藤久美子さん、塚田晴子さん、嶋田省三君くらいだ。

竹馬やいろはにほへとちりぢりに 万太郎



コロネ

地元

海田悠太

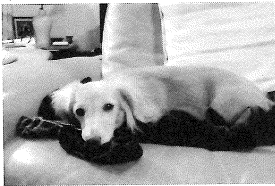
「地元」というものは重要な意味をもっていると思う。大抵の人は地元に対して何かしら強い思い入れがあると思う。

私は六歳の頃、この目黒という街に引越してきた。私は目黒の小学校に入学したが、この小学校に入学したことが今では私の大きな財産になっている。新しい友達ができ、目黒という街を毎日歩くことでいろいろな発見ができ、目黒にいることに徐々に違和感がなくなっていた。そう、目黒がいつしか自分の地元と言えるようになっていった。その大きな要因となったのは友達に恵まれたことだと思う。人にとって支えとなる人は絶対不可欠だ。その支えとなる人が目黒には何人もいる。今後の自分の人生において、この友情は絶対に切れることはないだろう。

もうひとつの要因として、この街は治安が良い。一言で言うところ、平和だ。住みやすいし居やすい。嫌なことがあっても目黒に帰ってくればなんと

なく心が落ち着く。目黒を選択し、あの小学校に入学させてくれた親に感謝したい。

さまざまな人生があり、それぞれの人に出生の場所があり、地元がある。地元とは人に安らぎを与えてくれる。人でもなく物でもないが、大きな存在感のあるものだ。私は今「地元はどこ」と聞かれたら、自信を持って「目黒だよ」と答える。私の地元は目黒しかない。目黒が好きだから。



バニラ

焼夷弾をつかめ

金武典夫

「ウォウー」……地底からの響き、空は魔鳥のようなB 29が天空を覆っている。焼夷弾は、火の雨となって降りそそぎ、五反田、目黒は炎の海と化している。

中空で、親爆弾が破裂、焼夷弾が私の上に降ってきた。私は頭からバケツの水をかぶり、火を噴いている家に飛び込んだ。焼夷弾は、屋根を突き破り、畳に突き刺さり、火を噴いている。焼夷弾を軍手で掴み、庭に放り投げる。メラメラ燃える障子、襖、畳、柱の火を消し止めることができた。

隣家の嶋田邸、鈴木邸の消化を応援する。既に周辺は炎の大海となり、どこにも逃げることもできず、三軒の家を護ることで助かることができた。

昭和二十年三月二十四日京浜地区大空襲、品川区の大多数は焼失した。

当時、両親は地方に疎開、十六歳の私は大学研究所に通うため事務員と東京に残留、終戦を迎えた。



ラッキー



ドレメ通りの思ひ出

椎野開八郎

昭和十八年（一九四三年）に椎野豊・ソヨ夫妻とその子ども達六人が、現在の杉野学園北桜寮と夕陽ヶ丘寮に挟まれた袋小路の一軒家に池袋から越してきた。

椎野豊（昭和五十五年、八十六歳で他界）は大正初期、志を立てて十九歳で単身ブラジルに渡ったが、何ひとつ芸を持っておらず、そのため家庭奉公や日雇いの農業労働者として辛苦をなめたり、ある時期には無一文同様に街角に立って手製のオモチャを売ったりもしていた。しかし次第に行商から貿易商へと身を起こし、やがては国際新聞記者として活躍するようになった。

波瀾万丈の約三十年におよぶブラジル生活に終止符を打ち、帰国と同時に同盟通信社（現在の共同通信）に勤務、退職後はブラジル大使館秘書、顧問を歴任した。その後は、南米訪問芸能団を組織して歴訪二回、昭和



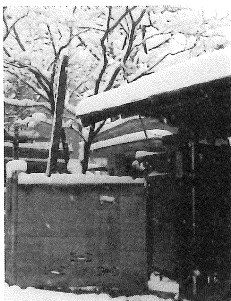
左は椎野宅、桜の右は翠松閣

二十七年には「移動文化展」を組織し、ブラジルと北米を四年間にわたり巡回、外務大臣より表彰を受けた。

当地に住むようになったのは、豊が勤務していた同盟通信社の社長であった岩永祐吉氏所有の關係宅を購入することになったからである。空襲では幸いにして被災を免れたが、当時はここから日比谷まで見通せたと聞いている。

私どもが結婚して住むようになった昭和四十八年頃、ドレメ通りにある現在の三井住友銀行計算センターはゴルフ練習場だった。また、現在のグリーンパームマンション建て替えの前の「翠松閣」は、テレビ番組の「西部警察」などの撮影に使用され、ドレメ通りが人だかりになっていたことが時折あった。

拙宅隣の玉木小児科には、親子連れの患者さんの往来をよく見かけた。この界限ではない私の友人や知人の子ども達が大きくなり、玉木先生に見ていただいたことや、時には時間を問わず往診願ったりして、たいへんお世話になった素晴らしい名医だったと、懐かしそうに話してくれた。彼らもいつまでもこのドレメ通りを覚えていてくれることだろう。



大雪の日



この頃はまだ子供たちが近隣に多く住んでいた

焼け跡の青春

田中稀一郎

早いもので、夕陽ヶ丘に移り住んでもう七十年になる。引っ越してきたのは、私が二歳か三歳の時であったから、記憶にあるのは現在の場所からである。

私の家は、ドレメ通りを通過してOKビルとフランス料理店の「アルカシオン」の間を右折した奥にある。戦前は一番奥の東条さん宅まで五軒ずつの個人住宅が両側に並んでいた。どの家も立派な門構えで、道に沿って高い塀があり、中を見渡すことができなかつた。

近所には同じ年頃の子が何人かいたが、いずれも女性で、あまり遊ぶ機会はなかつた。このため、庭で一人で遊ぶか、目黒川の川沿いにあつた植物園に行つて鳩に豆をやりながら、檻の中の孔雀が羽を広げるのを辛抱強く待ったりした。

町会長の金武さんのお宅のすぐ南側は雑木林が植物園の側まであり、



ドレメ通りから目黒川の方へ行く急な坂（この坂には名前がない）はまだ舗装されておらず、新型のダットサンが途中まで上がってきて、上がりきれずに引き返すこともあった。

現在、本多電機の入り口にある稲荷神社は雑木林の中に、ひっそりと鎮座していたが、本多電機がこの雑木林と植物園を買って工場を造る時に川沿いに移された。

戦前はドレメ通りで人が集まるような場所はドレメの校舎だけで、そのドレメの校舎も現在の第二校舎のある場所にひとつしかなかった。授業が終わると人通りがなくなり、夜は一人で歩くのが怖いぐらい寂しいところであった。

また、今の夕陽ヶ丘からは想像もつかないことだが、戦前、この辺りには松の木があちこちに生えていた。私の家の庭にも直径四、五十センチの松の木が四、五本生えていたし、雅叙園の庭には何十本も生えていた。これらの松の木は戦災で焼失したか、それ以降の大気汚染により、ことごとく枯れてしまい、今は全く残っていない。

昭和十六年（一九四一年）に大東亜戦争が始まり、私は小学生であっ

たため、地方に学童疎開させられ、昭和二十年（一九四五年）五月の目黒の大空襲の時は自宅にいなかった。ドレメ通りの家々も空襲の被害を受け、特にドレメの校舎（今の第二校舎がある場所）から南側は目黒川あたりまで、ほとんどすべて焼失してしまった。

疎開から帰ってみると、ドレメ通りの目黒駅寄りの半分は昔のまま残っていたが、私の家を含めて南側半分、約三十軒ほどが全焼していてがっかりさせられた

昭和二十一年（一九四六年）に新しい家が元の場所に建ったので、また住み始めたが、鉄筋コンクリート造りのため焼けなかった塚田邸と東条さん宅の土蔵を除いて、東側と南側は一面の焼け野原であり、屋根に登ると品川の海が見えたのには驚いた。

冬の日の夜は空気が澄んでいたせいか、寝ていると山手線の五反田駅に電車が着くと、ドアの開閉の音や車掌の吹く笛の音はつきりと聞こえてきたものだ。

昭和二十二、三年になると、周りの焼けた土地にも家が建ち始まり、住民も一部が入れ替わり、今までのいなかった男子の中学生が五、六人集

まるようになった。遊ぶ場所は焼け跡がたくさんあるので不自由しなかった。布製のマリと角材のバットで野球をよくやった。一番面白かったのはかくれんぼで、大邸宅の焼け跡には隠れる場所がいくらでもあった。かくれんぼには女子も入るようになった

当時はサマータイムが新設されたばかりで、夏は夜の八時まで明るかったので結構遊び甲斐があった。一番多く使わせてもらった場所は高橋邸跡（現在の杉野服飾大学のある場所）でいろいろな隠れ場所があった。現在ドレメの衣裳博物館の庭に陳列されている葵の紋が付いている大きな塔は高橋邸にあったもので、隠れ場所によく利用した。今も残っている高橋邸の塀を見ると、かくれんぼをした当時を思い出す。

現在ドレメの第二校舎の中にデンと収まっている高い煙突は戦前のドレメ校舎のもので、校舎は焼失したが、煙突だけニョッキリと残っていた。煙突には梯子が付いていたので一度トライしようということになり、何人かで一番上まで登ったが、焼け梯子だということに気が付き、一度登っただけで止めてしまった。

毎日焼け跡ばかりで遊んでいるので、たまには違うところに行ってみ

ようということになり、現在農林中金の目黒分室がある場所にあった岩永邸が進駐軍に摂取され、その裏庭が素晴らしいという話を聞きつけて、一同で押し掛けていった。なるほど、裏庭は当時としては珍しく芝生が青々と生えており、ちょうどその家のメイドさんが二、三歳の男の子のお守りをしていたので「ちよつと遊ばせてください」と頼んで、庭でボール投げをしていると、間の悪いことに、主人の佐官クラスの人が帰宅して、庭に見馴れない日本人の男の子が四、五人いるのを見て、すごい剣幕で怒り出した。

われわれがそつと逃げだそうしていると、メイドさんが気をきかせてくれて、「あの子たちは、××ちゃんと遊んでくれるために庭に入っただですよ」と言ってくれた。それを聞いたとたんに主人は相好を崩し、「それなら話は別だ。皆、中に入って××ちゃんと遊んでやってくれ」ということになり、われわれが手にしたことのないアメリカン・フットボールのボールを貸してくれた。

三十分ぐらいその子と遊んだが、帰りしなにもらったチョコレートのおいしかったこと。特に初めて食べたマシユマロの味は、今でも忘れら

れない。

最後に、同じ進駐軍でも、とても怖かった話をひとつ。ドレメの杉野邸（今の杉野記念館）は戦災で焼けなかったので、前述の岩永邸と同様に進駐軍に攝取され、米軍の将校が入居していた。ある日の夜十時頃に、田舎に食料品の買い出しに行った帰りに、目黒駅から人っ子一人通らないドレメ通りを連れと二人で帰ってきた。杉野邸を過ぎ、奥村さん宅の角を右折して五、六歩行った時、杉野邸の二階のバルコニーから「パン」という音が聞こえてきた。とたんに頭の上をビューンという音とともに弾丸が飛んでいき、二、三秒して、またパン、ビューンと二発目が頭上を通り過ぎた。

ライフル銃の音はこれで終わったが、きっと酒に酔った将校がヒヤカシのつもりで撃つたものと思う。今まで鉄砲の実弾を経験したことがなかったなので、最初は何がなんだか分からなかったが、後でゾーツとしてきた。それにしても、あの二発の弾丸は不動前の方向に飛んでいったのだが……。



私の夕陽会

田中公平

私は昭和十六年（一九四一年）三月に現住居地（正確には一軒右隣）に生まれました。この年の十二月八日に真珠湾奇襲作戦が決行され、アジア太平洋戦争が始まったのです。二歳の時に父が出征し、祖母と母そして私の三人は、親戚を頼って祖父の故郷である岐阜県養老郡に疎開しました。

昭和二十年（一九四五年）八月十五日に終戦になり、私たちは東京に戻りました。記憶にある上大崎四丁目の風景はそれ以後のものということになります。

明治時代に祖父母が東京に出てきたころは、この辺りは竹藪が多く、東京映画という映画会社のロケによく使われていたとのことでした。まだ無声映画の時代のことだと思えます。

古い地主さんによれば、祖父は馬に乗り、猟銃を持って、雉や鶉を撃つ

ていたといえますから、まだまだ田舎だったのでしょう。荏原区と品川区が合併して現在の品川区が出来たのは昭和二十二年（一九四七年）のことですし、人口が増えてきたのは関東大震災の頃からのようです。

権之助坂の方は、行人坂が急坂で人々が難儀をしていたので、名主の菅沼権之助が村人と苦勞して完成させたそうですが、無許可であったため斬首されたそうです。それを哀れんだ住民が「権之助坂」と呼んだとのことです。

私が大好きなものに、桜、富士山、夕日の三つがありますが、江戸時代からこの辺りはこれら三つの名所として名が知られていたようです。行人坂の途中に富士見茶屋という茶屋があり、参詣や行楽の人たちで賑わったそうです。当時の目黒名物であった「筍飯し」や「鮎料理」を供したといえます。

行人坂を下ると目黒川に太鼓橋という橋がかかっています。江戸時代には文字通りの太鼓橋であったそうです。『名所江戸八景』には、安藤（歌川）広重の錦絵に「目黒太鼓橋よりの夕日の岡」が描かれています。明王院・大円寺一帯は夕日の岡といわれ、紅葉や桜の名所であり、江戸市

目黒通り駅前交差点
から東口方面を写す
(昭和39年 1964年)



民の清遊の地であったとのことでした。

今では高層ビルの陰になつたり、スモッグのために富士山が鮮明に見えることが少なくなりましたが、二十年ほど前まではよく見えました。寒い朝に富士の雄姿を見ると身も心も引き締まったものです。

夕日や夕焼け空も美しく、行人坂の上から飽かずに見ていました。

目黒川兩岸の桜並木は、五反田から中目黒まで数キロに渡り続いており、今では遊歩道も整備され、毎年春になると大勢の人々を楽しませていきます。

このように夕陽町会のある場所は、富士山、桜、夕日が昔と変わらず人々に愛されてきた素晴らしいところなのです。

夕陽会の最大の特徴と言えば、山手線や東急線、地下鉄線の目黒駅に近く、便利であるということです。駅や権之助坂商店街等に至便であるにもかかわらず、かつては閑静な住宅街でした。最近は閑静という言葉とはほど遠くなり、残念に思っています。

終戦直後の上大崎四丁目は本当に閑静なお屋敷町でした。



アトレ目黒の屋上から見た富士山

もちろん戦争の災禍は四丁目も例外ではなく、空襲により破壊された家々もたくさんありました。

幸い我が家は焼け残りでしたが、父は生死不明のままでした。また、留守を頼んだ人はどうせ燃えてしまうと思ったのでしよう、家財等はすべて売り払われてしまっており、無一文からの再スタートでした。

配給制度がありましたでしたが滞ることも多く、とても家族三人が生き続けている状態ではありませんでした。母の内職でなんとか飢えを凌いでいたのだと思います。母に連れられてわずかばかりの衣類を持って、農家に食糧を分けてもらいに行ったことを覚えています。庭では、キュウリ、なす、トマト、インゲン豆などを作っていました。現在なら趣味の家庭菜園というところですが、当時は生きていくために皆必死だったのです。引き揚げてきてから行人坂教会幼稚園に通いました。まだ岐阜弁であつた私は、なかなか子どもたちの遊びの中に加わることができませんでした。

日曜日には行人坂教会に通い、キリストの教えを聞いたり、オルガンの伴奏で賛美歌を唱つたりしました。これらのことは幼い無垢な心に強

い印象を与えました。

小学二年の年（一九四八年）にシベリアに抑留されていた父が帰国し、働き始めると徐々に生活が安定してきました。

小学校は田道橋のたもとに染物工場や家作があったので、目黒区に所のみ寄留して田道小学校に通いました。学校の帰りには権之助坂のヤミ市で油を売るのが常でした。商店街の人によく母に告げ口されたものです。小学校から中学校の頃にパチンコが大流行し、子どもでもやらせてくれました。仕舞いには中古のパチンコ台を買って家庭でも楽しんだものです。

向こう三軒両隣といいますが、ドレメ通りの我が家の向かいには、まさにお屋敷が三軒並んでいました。いづれも立派なお屋敷でした。この三軒が現在「さくら情報システム」になっているところです。角の家は貝島さんというお宅でしたが、その後、三越デパートの配送センターになっていました。

嬉しいことに三本の大きな泰山木の木が今でも「さくら情報システム」の正面に残されており、毎年五月頃に白い大きな花を咲かせ、甘い香り

で私たちを喜ばせてくれています。

真ん中の家は住友グループの社宅だったと思いますが、当時はアサヒビールの社長であり、財界でも活躍されていた山本為三郎さんが住んでおられました。

一番右側は、住友グループの寮になっており、会合や宴会等に使用されてきました。いつもきれいに打ち水がされ、昼間は管理人の方だけでしたいへん静かでした。信じられないようなことですが、ここがごく短い期間ですがゴルフ練習場になっていたことがありました。

ゴルフ練習場としては大きくありませんでしたが、打席は十打席くらいあり、当時、大学ゴルフ界のナンバーワンであり、幾多のプロゴルファーを排出した日本大学のゴルフ部が練習場のひとつとして使っていました。日大名物の連続千回素振りという練習方法があり、皆フラフラになりながらクラブを振っていました。あの中に現在活躍しているプロがいたかもしれません。

この三軒のあったブロックと現在フラワーヒルと紀ビルクリニックのあるブロックとの間には細い道があり、目蒲線目黒駅側の道に通じてい

ました。ドレメ通りの奥に行かれる方は、こちらの道を通ることも多かったです。

ドレメ通りの西側、我が家の並びには四軒の家が通りに面して並んでいました。これら四軒の家の奥、目黒区側には川崎家がありました。川崎家は元男爵家で、広大な敷地に大きな西洋館と日本家屋の棟がありました。

通りに面した中島家と竹島家の二軒は川崎家の家作でした。そのため正面は石の塀になっていましたが、川崎家の執事だった蓮池さんのお宅を含め庭続きで仕切りがありませんでした。中島家には私より一歳年下で頭は数段賢い俊一君という男の子がいて、私の唯一の遊び友達でした。庭づたいに裏口からどの家にも上がり込んで、時には食事を一緒にいただきます。

終戦直後には、川崎家の西洋館はスウェーデン公使館になっていました。公使館には護衛のための進駐軍の兵隊さんがいて、ジープに乗せてもらったりしていました。西洋館の正面玄関前は大きなケヤキを真ん中にした広い車回しになっていました。兵隊さんのヒザの上に立ち、ハン

ドルを持ち、自分で運転している気になって得意になっていました。この車回しから広い芝生の庭、さらに雅叙園の方につながる林は蝉や蝶々を追いかける格好の遊び場でした。

その後、香港園がこの西洋館で中華料理店を始めました。当時、日本では数少ない高級中華料理店で、大正時代風の西洋館の豪華な個室で食事をするという独特な雰囲気とおいしい料理でたいへん繁盛し、東京の名店のひとつになりました。

竹島さんの敷地内に中島さんの親戚の小谷愛子先生という女医さんが「小谷耳鼻科」を開業されました。

「耳鼻科」のあとに「デルダン」というパン屋さんがオープンしました。まだコンビニなどがない時代でしたのでたいへん重宝しました。

昭和二十二、三年頃から二十七、八年頃までの四丁目は人通りの少ない静かな住宅街でした。

朝は新聞配達や牛乳配達の人々が暗いうちから忙しくしていました。納豆売りも毎日やってきて朝の食卓によく納豆がのりました。野菜やヤミのお米を担いで売りに来る「担ぎ屋」のオバサンたちがいました。卯

やあんころ餅なども持つてくることもあり、皆楽しみにしていました。各家庭でゴスロイのオバサンが違っていました。

現在ではなくなくなってしまった商売に「氷やさん」があります。リヤカーに氷の大きな塊を乗せてやってきました。各家の前で注文に応じて一貫目ずつ切り分けてくれました。まだ電気冷蔵庫のなかった時代、氷は必需品だったので。シャキシャキと氷を切る音が夏の風物詩として涼しさを運んできました。

昭和二十五年（一九五〇年）六月、朝鮮戦争が始まると、低迷していた日本経済に特需が来るようになり、日本経済も急速に回復していきました。米軍の兵隊さん達が朝鮮への行き帰りに日本に立ち寄るわけですが、その宿舎のひとつに四丁目の中程にあった雅叙園観光ホテルがありました。

この兵隊さん相手の商売のひとつに売春がありました。薄暗くなると「パン助」とか「パンパン」と呼ばれていた女性が我が家の付近にも出没しました。我が家の横には川崎家の裏門に通じる路地があり、そこで値段の交渉が行われるのですが、酔って大きな声で話すので、私の部屋

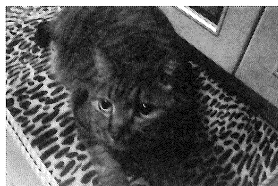
にまでよく聞こえてきました。

当時中学生だった私は夜は受験勉強中でしたが、いわゆる、パングリッシュなる英語を生きた英語として学びました。私の英語が未だブロークン・イングリッシュなのはこのためかもしれません。

美濃部都知事の革新新政になった頃、目黒川沿いの工場は地方に移転を余儀なくされ、父も東京で仕事をすることを断念しました。しかし、景気が良くなると昔の工場跡地に次々とオフィスビルが建ち、目黒雅叙園もホテルと宴会部門を新しく建て替え、さらにアルコタワーと名付けられた高層ビルができ、一日中人の流れの絶えない街になりました。

目黒通りの渋滞は恒常的なものとなり、この渋滞を避けるため山手通に抜ける車がひっきりなしにドレメ通りを通るようになりました。

今後ますます速度を上げて変化を続けていくことでしょう。私が生まれ育った夕陽会の町会が今後美しく住みやすい町会として長く続くことを心から祈っています。



青春時代の思い出の場所

田中卓次

現在の家屋は昭和六十三年に私が新築したのですが、この土地は昭和十三年八月に私の養子先の田中廣が取得したものです。その後、養父が亡くなり養母の田中ハルが家督を相続し、昭和二十一年九月に亡くなるまで、持っていました。

私は昭和二十二年一月に田中家を継ぐために入籍し、この土地を相続しました。そのときは戦災で家は焼け、土地だけが残っていました。私も年少であり、実家で暮らしていましたので、そのころのことは全く覚えていません。

昭和三十二年に私が高校生の時、その土地に父が家を建て、家族で暮らすことになりました。当時、私の家の前は目黒川まで空き地で、前を目蒲線が走っていました。正面に青物市場があり、その先に国鉄の五反田駅がよく見えました。二階の窓からは富士山も綺麗に見え、風通しも

良く、とても見晴らしの良い家でした。毎日、下の空き地に犬の散歩に行つて遊んだことを覚えています。

大学に進学するようになると坂上の杉野ドレスメーカー女学院の生徒と正面から行き会うので、毎日、下を向いて目黒駅に行つていたの思い出します。また、学生時代は雅叙園ホテルに外人が多く出入りしており、いかがわしい客引きがたむろしたり、今は一方通行になっていますが、当時は大きなトラックが急坂をあがるため、騒音と排気ガスに悩まされたり、あまりいい環境ではありませんでした。

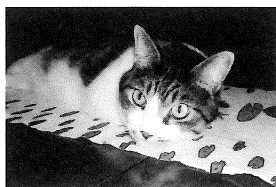
我が家と道を挟んで前が芝生の土手になっており、お昼時にはドレメのたくさんの女学生が私の部屋を見下ろしながら昼食をとるので、窓のカーテンを開けることもできず大いに困りました。

今では空き地も青果市場もなくなり、五反田駅も富士山も見えなくなつてしまいました。その代わり見渡す限りビルができ、後ろには大きなマンションが建ち、目黒駅からの道もお屋敷がなくなり、校舎や数々のお店が並んで、すっかり様変わりしています。

昭和六十三年に子どもも三人になったので、住むつもりで家を建て替

えましたが、突然、会社から中国の北京に転勤を命ぜられ、数年後に戻った時は諸般の事情からそのまま貸家として使うことになり、現在に至っています。

昭和三十二年から四十八年に結婚するまで、十数年を夕陽ヶ丘で過ごしたことは、私の青春時代の思い出として、いつも懐かしく思い出しています。



ゴンノスケ

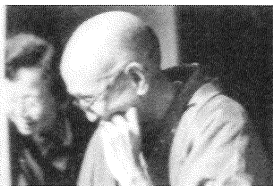
辛夷と飯塚さん

谷口保澄

私が夕陽丘に住んでいたのは昭和二十二年から四十二年の春の間の二十年余であった。東京にいる三人の姉弟と一緒に住めるようにと建てた家であった。家の南側は一面焼け野原で、夜になると縁側から池上線五反田駅の電車の発着が見え、品川沖の船の汽笛が聞こえてくるような状態であった。母が記念にと、梅や桃、木蓮等の木々を買ってきて、庭らしくなった。

しばらくして、遠縁の飯塚さんご夫妻が、子ども達の監視役を兼ねて一緒に住むことになった。ご主人は職業軍人で、戦時中に一時姉が世話になっていた頃は、毎朝、当番兵が馬で迎えに来ていたそうだ。

戦争に負けて、神様が人間になったりと世の中がすっかり変わってしまい、隠遁生活を余儀なくされていた。庭木を丹精込めて手入れし、花を植えて、それなりの庭に仕立て上げてくれた。よく宝籤を買っては外



飯塚夫妻

れクジを手製の碁盤の裏に貼っていた。何をしているのかと思ったが、きつと現状からの脱却を夢見ていたのであろう。

やがて町内に青年会が結成され、会報を作る話が出たのを契機に謄写版の耕筆を請け負った。何事にも手を抜くこともしない性で、年老いた眼を駆使しながら夜遅くまで机に向かっていった。

先日、奥村邸を訪れ、保存されていた会報を拝見し、几帳面な仕事ぶりに見入りながら、打ちのめされた生活の中にやり甲斐のある仕事を始めて生気を取り戻した様子が思い出された。

戦後六十年の節目には当時の有様がいろいろと報道された。多くの人が辛く苦しい体験を強いられた時代、飯塚さんも渦中の一人であったが、中学生であった私は、その辺りの事情を察することもできずに対応していたことを思うと、心が痛む。

飯塚さんが亡くなった後、手入れを怠った庭はすっかり荒れてしまい、数年の間大輪の花をつけていた木蓮は接ぎ木をした元木の辛夷にかえってしまい、やがて一抱えもある大木に成長し、庭全体を覆って他の草木を枯らしてしまった。早春に咲く白い花は、かの地のランドマークとな



り、道行く人を楽しませた。家内が陶芸を始め、木の下に窯を設けた際に「辛夷窯」と名付け、秋には落ち葉を集めて燃やして釉薬を作り、焼き物に使ったりしていた。

先日、何年かぶりに訪れてみたら、数軒の家が建てられ辛夷は姿を消していた。でも、今の家にある窯には「辛夷窯」という名前を残し往時を偲ばせている。



私が小さかった頃

つかだはるこ

私は、終戦の年に生まれた。気が付けば四歳下に弟が一人。祖父母と両親、独身の叔父とじいやの八人が一つ屋根の下で暮らしていた。離れには進駐軍で働く二世の福島さんという一家が住んでいた。おばさんと娘二人だった。ときどきジープで背の高い兵隊がやってくるという匂いのお菓子をくれた。子ども心にも遠慮がちに、福島さんのおうちをそーっと見に行った。

熊野さんの家に続いて、これも取り壊されてしまったが、うちの裏は、雅叙園観光ホテルだった。戦時中は軍の病院だったという。終戦後、雅叙園観光ホテルはG Iの宿舎として使われていたので、アンセルモ教会の前には、パンパンと呼ばれるひらひらしたスカート綺麗なお姉さんや、ポン引きと呼ばれるカッコつけたおじさんがいつも立っていた。きれいなお姉さんたちが兵隊さんたちと腕を組んで歩いているのを見て、

弟は、「仲良しなんだねえ」と感に堪えないように言うので困った、と母は笑う。

物心付いた時、まわりは焼け跡が多くて広々としていた。うちはコンクリートなので焼け残ったが、陸屋根には小屋が組まれ銅の屋根が載っていた。戦争中百発近い焼夷弾が屋敷に降り注いだらしい。留守番をしていた祖母は、爺やと二人で屋根に上がって必死で消火したという。後年、断熱材を敷きに小屋裏に入った職人は、焼夷弾で炭化した材木で全身真っ黒になって出てきた。十センチ角の材木が炭になるほどの空襲だった。

家に続いて三間四方の二階建ての蔵が立っており、蔵の上は子ども石蹴りにはもってこいの広さの屋上になっていた。まだ高い建物などどこにもなかった時代で、夏にはここから多摩川の花火がよく見えた。晩御飯を食べていると、どーんどーんと音がする。食事がすむと家中のものが花火見物に上がった。壁は昼間のお日様の余熱でぼかぼかしていたが、クーラーも車もない時代には夏でも夜風は涼しく気持ちよかった。

離れの福島さんが出て行くと、中国から引き上げて来たおじの一家が



庭園でのスナップ

そこに住んだ。私と同い年の女の子、弟と同い年の男の子、その兄と姉。屋敷の中は大勢の子どもの声であふれていた。夏休みになると、長い竹ざおの先に祖母が手ぬぐいで縫ってくれた袋に針金を通して、蟬取り袋を作った。一日中六人が一団となって庭中をうろつき、かご一杯になるほど捕った。ニイニイ、あぶら、ミンミン、ヒグラシ、ツクツク法師。大きいお兄さんはホントに上手だった。イチジクの木にはカミキリムシが良くついたし、玉虫も時には見つかった。

雅叙園の森には「ふくろう」が鳴き、夜など怖かった。「こじゅっけい」の子育ても見ることができた。百人一首や福笑い、メンコにビー玉、母が作ったコロコロして上手いかないお手玉やおはじき、缶蹴りやかくれんぼ。大勢いたればこそ、喧嘩もしたけど楽しかった。

同い年のいとこと一緒に木造の小さなアンセルモ幼稚園に通っていた。初めてのクリスマスには、ドイツ人のヨゼフ神父様がサンタクロースになって煙突の中から出ていらしたのにはびっくりした。もちろん神父様とは思ってもせず感激した。次の年には煙突の中が見たくてすっかり悪い子になっていた。こういう時に大人は決してお利口になったわね、

とはいってくれない。

私たちが卒業すると、教会の建築が始まった。ライトの弟子で日本に居残り、その後の建築をリードしたレイモンドさんが設計した。できあがった建物を見て、その頃の人のみな一様に驚き、眉をしかめた。まだ出来上がっていないようだと言った。

真新しいモダンな幼稚園に入れていただいたのが弟といとこ。お御堂にせずと進む神妙な面持ちの弟たちを見てうらやましく思った。いつ見ても本当に美しい空間だ。祭壇も十字架もいい。神父様のお説教は聴きづらけれど、賛美歌はますます美しく聞こえる。

祖母が身を挺して焼夷弾から守り抜いた我が家も、岡田信一郎というライトに学んだ大建築家が大正十三年に村井五郎氏の依頼で建てた数少ない個人邸の一つであった。玄関に続いて、和室とホール、二つの応接間があった。

ホールの窓には、ステンドグラスが入っていた。デザインは、浄瑠璃の国政爺合戦の一場面で親孝行な和藤内が襲い掛かるトラに護符を示している。それは、日本のステンドグラスの草分け



浄瑠璃のステンドグラス

の職人の貴重な作品ではあるが、ホールを薄暗く陰気にしていた。そのステンドグラスは今、芸大の美術館に保管されている。

水洗になるまでは、臭かったし、ふかーい穴がとても怖かった。ときどき天秤棒を担いだ人が汲み取りに来た。汚物をひしゃくで桶にくみとり、それを運び畑の肥料としていた。立派なりサイクルである。寒肥はその自家生産品を利用していた。

この家で特徴的だったのは、東端の玄関から西の奥にある蔵の前まで一直線に十間余り、子供が徒競走のできるような幅の広い廊下が通っていた。廊下の南側には、寝室、食堂、ペランダ、寝室、仏間、下の便所があり、北側に書生部屋、爺やの便所、おじの部屋、電話室、女中部屋（大嫌いなピアノが置いてあった）、台所、内玄関、爺やの部屋、暗室、洗面所と風呂といった具合であった。

風呂場は六畳ほどもあるタイル張りで、天井も高く、冬など風邪を引きに入るようなものだった。風呂場の中に石炭をたく釜と檜の風呂桶が置いてあり、入る前に自分で沸かす。煙突が詰まっていたりしようものなら、煙くて風呂に入れない。そんな時代だった。

女中部屋があるくらいだから、台所もやたらに広くて八畳もあった。ここのタイル張りで内玄関と通じていたから、冬はひどく冷え込んだ。女中部屋はあったけれども女中はもういなかった。母が一人でその任に当たられて、私はお嬢様なのに……と涙する時代になっていた。

台所口には、屑屋、押し売り、氷屋、豆腐屋、魚屋、八百屋などが次々と面白いように現れ、商いをしていく。朝は、納豆や蜆売りの声かすると入れ物を持って飛び出していく。屑屋は、ワインの頭の鉛や歯磨きのチューブも持っていた。その頃のチューブは、プラスチックではなく金物であったからだ。道端に落ちている釘も拾った。ひどいときには、マンホールの鋳物のふたが盗まれさえた時代だった。夏の氷屋のリヤカーは、子どもたちをぞろぞろ連れて行った。半貫目とか一貫目とかお客の冷蔵庫の大きさに合わせて行く先々で大きな氷をのこぎりでひく時、あわよくば小さな氷にありつけるからだ。

現在埼京線が通っている線路は、SLが通っていた。私が小学校低学年ごろまでは海水浴に行くにも汽車に乗っていた。

汽車を見るために、毎日目黒駅まで出掛けた。もくもく、モクモクと

真つ白い煙を吐きながら汽車が通るのをらんかんから身を乗り出してみる。下を汽車が通ると、橋の上いっぱい白い煙が上がって、何も見えなくなる。浦島太郎がおじいさんになる時みたいだと思った。その煙の中から、材木や機械や牛馬を乗せた荷物列車があらわれて、次々と目の下を通りすぎて行つた。

夕陽ヶ丘には、芸術家が多い。杉野夫妻を筆頭に、アンセルモ幼稚園の同級生だった美和ちゃんのパパは報道写真家の草分け、名取洋之助氏だし、その棟続きに画家の若き阿部慎蔵氏がいらした。アルカシヨンの角には、人間国宝の喜多六平太翁が住んでおられた。小さな小さな腰の曲がった老人だったが、この方が舞台に立たれると、とても大きく見えるのは何とも不思議だとよく祖母が言っていた。通りの反対側には、お三味線の杵屋四六助氏が居られた。いつでも角帯を粋に締め、つやつやと元氣そうで誰にでも愛想が良く、外股にせかせかと急がしそうであった。今はお嬢さんがお三味線を教えておいでになる。

夕陽ヶ丘とは、何と美しい町に住んでいることだろう。浮世絵の時代から、ここは目黒不動への楽しいハイキングコースに入っていたという。



コロ

四丁目の記憶

土岐(旧姓・東条)敦子

終戦前後、配給や夜回り、駅の通りの交通整理、それに町会の雑事までこなしていたツルツル坊主のオジサンが、ある日から姿を消してしまった。代わって各戸を巡回していたのは、若くてういういしい巡査だった。その巡査は、庭先にたたずんで母と言葉を交わすようになり、田舎から送ってきたといって柿を数個持ってきてくれたり、表彰されたと言ってはうれしそうに報告していた。

ある日、ためらいがちに一枚の紙片を私に差し出して、これを英語の手紙にしてくれないかと言う。当時、パンパンと称する女性にどう頼み込まれたのか知らないが、その優しいお巡りさんは同情してしまっただけらしい。

なんでも、進駐軍の彼氏が本国に帰ってしまい、生活が苦しくなったとのこと。戻ってきて欲しい、今でも愛しているという趣旨で、それも

多少オーバーに綴ってもらえないか、というのである。まさに「マイ・ハート・クライズ・フォー・ユー」だ。お堅い父は苦笑い、情にもろい母は「やっておあげなさいよ」と言う。そこで私は二、三回ほど甘いラブレターを書く羽目になった。

終戦直後、進駐軍宿舎だかクラブだかになった雅叙園観光ホテルの入り口に、夜になるとポン引きと呼ばれる男が一人二人うろろろする時代だった。目黒駅からの一本道であるために、どうしてもそこを通らなければならなかったが、さっさと過ぎてしまえばさほどの不健全さは感じられなかった。むしろ、夜遅くまで最上階のコーヌコピアというダンスホールから焼け跡に流れ出ている音楽に心地よくひたってしまった。

町の風紀を取り締まるべき役にいながら、生活苦の女性に少しでも力を貸そうとしたお巡りさん。昭和二十六、七年の頃であったか、今思うと、みんなどこかにずっこけた温かさを持ち合っていたような気がする。

ドレメ通りは、小学校低学年の私にとって、日中はなんと静かで長い一本道であったことか。ポストのところであまり少しかわはするものの、遙か向こうから近づいてくる人を見つめる時間はずいぶんと長かった。

遠くにたった一人、端の方を歩いてくる虚無僧姿を見ると、怖くて、今来た道を走って引き返すほかはない。「悪いことをして牢屋から出てきたばかりだから、顔を見られたくないんですよ」と女中に言われていたので、編み笠の下にはどんな顔があるのかしらと思いつながら、気づかれないように走ったものだ。人さらいと混同していたのだ。でも、野犬と違って追いかけてきたり、飛びかかってくるわけでもないから、まだよかった。

行人坂の下り口に墓塵を敷き、あぐらをかいて尺八を吹く坊主頭の男がいた。盲目だったらしい。

小さなかごの前に自分の娘であろうか、私より二つくらい年下の女の子を座らせていることもあり、ねんねこ様の紐で負ぶっているときもあった。私が物心付いたときから昭和十三年ごろまでの、雨が降らない昼間の、なにやらもの悲しい光景であった。

ある日、たまたま自動車二台が曲がり角の行き違いに手間取っていたとき、彼が眼を開いているのを偶然見て、なんとなく安心してしまった。それからは、不思議にその後の記憶は絶えている。



桃(もも)ちゃん

私と夕陽丘

野澤 清

カナカナや思い出したくない記憶（无陀无子）

私は昭和十七年（一九四二年）、十歳の時、父の転勤で宇都宮からこの目黒に引っ越して来ました。生まれはまだ田園であった頃の荻窪ですが、満州国建設やら五・一五事件、日中戦争など、もの心つく前から日本の怪しい時代でした。

荻窪で幼稚園、尋常小学校に入学しました。南京陥落の祝賀提灯行列にかり出され、昭和十五年の皇紀二千六百年紀元節では校庭で紀元節の歌を歌ったことを覚えています。時代は怪しくなっていました。ただ古きよき時代の原風景でした。

小学二年生の時、父の転勤で宇都宮に越しました。この年、昭和十六年十二月八日は太平洋戦争開戦です。その日の朝の学校での子ども達は大興奮でした。海無し県の宇都宮にも海洋少年団なるものがつくられ、

隊員にさせられます。手旗信号を習わされ、剣道か柔道を選択させられ、剣道をやりました。私は比較的優等生でしたが、行進をし、軍歌を唱い、どンドン軍国少年になっていきました。

宇都宮には第二十六部隊という精鋭軍団があり、そこへの兄の出征を見送りました。この兄は満州で終戦を迎えシベリヤに抑留されました。この目黒の家に帰ってきたのは終戦二年後です。

小学四年生の時にまた父の転勤で目黒へ来ました。疎開騒ぎに逆行する転入ですから小学校は渋谷の山谷小学校でした。山手線で通学していましたが、電車が明治神宮の横を通る時、大人も子どもも電車の中から森に向かって頭を下げていた。戦争中の子どもはどれだけ強制義務のお辞儀をさせられたことやら。

転校後すぐに集団疎開で静岡森町へ。ムササビの飛び交う山中の禅寺で客殿広間が教室です。正座の授業、教育勅語の丸暗記、歴代天皇名の棒暗記、お寺ですからお化け話の夜の便所の怖さ、川の氷を割っての冷水摩擦、そのまま裸でのラジオ体操……。

十三歳の私は、それなりのひもじさにも耐え鍛えられました。なにし

ろ「ほしがりません、勝つまでは」の時代ですから。殺生禁断の寺域の中、子ども達の無差別自然破壊や殺生を見てもない振りをしてくれた。たお坊さんに会えたことを感謝しています。

夕陽丘は震災前は静かな邸町でした。でも、この目黒には幼なじみや学校の友人はいません。知っているのは隣組の四、五軒だけという孤独な軍国少年でした。

中学は府立八中。空襲下で急遽入学試験が中止され、全員合格。ろくな授業もなく学校の周りの強制疎開の建物を取り壊しの手伝いなどをしている内に、今度は縁故疎開で栃木県立大田原中学に編入しました。ここでも農繁期の農家の手伝い、松根油掘り、山林開墾、畑のなかで艦載機の機銃掃射を受けました。もちろん満足な授業はありませんでした。

そして昭和二十年八月に終戦です。校庭でとぎれとぎれのラジオの声は意味不明。同居していた兵隊さんの泣き声で、どうやら負けたらしいことがわかりました。夏の青い空と蝉の声だけの記憶です。

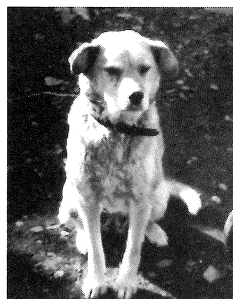
竹槍の竹に戻りて終戦日（「奥村京子句集」より）

当年の空蟬いづくに葬らん（无陀无子）

兵隊さんにならなくても良い、死ななくてもよくなったという安堵感はなく、虚脱感と軍国少年であった分の不安で一杯でした。敗戦と同時に始まった大人の動揺、先生の変質、アメリカのG Iが来た時の対応は大人も子どもも誉められたものではありませんでした。とにかく、価値観の大変動にはとまどうばかりでした。

やがて大学受験。浪人三年目で東京農業大学造園科に入学しました。この浪人中に夕陽丘親交会が出来て、請われて参加しました。私は疎開、転入が激しかったので、夕陽丘町会とは無縁でした。とくに通りの奥の方のことは、まったく知りません。戦後、焼け跡のあたりにあった畑を手伝った記憶があるだけです。浪人中で家に居づらい境遇、これ幸と出席し、多くの人に出会いました。

それまでの私は、近親、近縁、わずかの友人だけの甘えた社会しか知りませんでしたから、とても新鮮な世界でした。農大と家と夕陽丘に自分の居場所を見つけられたことに大いに感謝しています。この夕陽丘は私の故郷です。



ベル

上大崎四丁目

牧野雄一

昭和四年（一九二九年）の秋、私の父司郎が生まれて初めて買った土地が上大崎四丁目だった。家を建て家族七人で麻布から引っ越してきた。駅に近く便利で、しかも閑静なので父は大いに気に入っていた。父は不動貯金銀行の常務で洋画家でもあった。新しい画室ができて帝展に出品して入選。昭和十一年（一九三六年）には文展無監査になった。

昭和十七年（一九四一年）二月、私は甲種合格の現役兵として近所の小松原さんと部隊は違ったが、歡呼の声に送られて入営の途についた。小松原さんとは、後に近衛師団の集合教育で会うことができた。

昭和二十年（一九四五年）五月の帝都大空襲で我が家は全焼。父も母も消火で危ない目にあつた。そのとき私は九十九里浜の米軍上陸に備えた防衛部隊について、上総一ノ宮から東京の空が真っ赤に燃えているのを淋しく眺め、我が家もやられたかもしれないと思つた。

その年の九月に復員、塀だけが残っている我が家を初めて見て、焼け跡のすごさにびっくりした。庭の片隅に残った小屋で父は立ち退きはしないと頑張っていた。母は私の愛読書を独りで荷造りし、疎開してくれていた。助かった本を見てありがたかった。

昭和二十年（一九四五年）父は終戦直前の貯蓄銀行統合で退職。戦後、焼け跡に目黒洋画研究所を建て、若い人たちを指導しながら日展に出品した。財産税納付で土地は三分の一が残っただけだったが、そこに家を建てた。母が亡くなってから二年半後の昭和四十七年（一九七二年）七月、父は七十九歳の誕生日を迎えた翌日に亡くなった。

戦後の四丁目は洋裁ブームで、ドレメ通りとして賑やかになり、杉野学園の生徒さんであふれた。私も毎朝、通勤で駅に向かうと、登校する生徒さんとすれ違うのが楽しく、そのことを会社で話すと、とくに同僚がうらやましがった。

昭和二十七年（一九五二年）、私は結婚で四丁目を離れた。三年前に亡くなった弟俊雄がアンセルモ教会の納骨堂に眠っているが、改めて上大崎四丁目のつながりの深さを考えるようになった。

柿の木のおぶやき

町中須威子

「あつ」 またあの人を通る。私がなぜここにいるのかと訝しげに見上げる輩だ。私だって居心地は良くないよ。彼の有名なドレメ通り、その学園の正門わきで、そこを田舎の風景にしている私、実は柿の木なのだ。故・杉野芳子女史が昭和初期に、ドレスメーカー女学院を開校し、あつという間に洋装文化のリーダーとして大成した。全国の良家の子女がこの門をめざしはせ参じ、ドレメ王国と言わしめたところなのだ。あのころが懐かしい。

塀から乗り出している私を、その辺の柿の木と一緒にしないでほしい。ドレメの歴史とともに歩んできた木の幹は、皆に愛され、触られ、いぶし銀のように磨きこまれている。私は、ここで腕を競い火花を散らし、デザイナーとして世界に飛び出し、また、愛を語り合った人々など、ここで繰り広げられたドラマの生き証人なのさ。

ドレメ通りの季節感と変遷

柳澤浩一

私は、平成八年（一九九六年）上大崎四丁目に引っ越して夕陽会の仲間入りをしました。

今年の冬は例年になく寒く、やはり昔と比べてしまいます。このようなことが気になるのも、年を重ねてその領域に浸透してしまったのだからと思えます。

年月の過ぎていくスピードが私の年齢とともに加速されているような気がする今日ですが、上大崎四丁目に移り住んで、もう九年が過ぎました。この界限は「駅から近く、それなのに静かで、便利で住みやすい」といわれています。ドレメ通りは一方通行ですが、そのことは不便さよりも静けさをもたらしています。ドレメ通りも、実はかなりの季節感があつて、毎日行き来するのが楽しいです。

アンセルモ教会、目黒パークマンションの片隅や杉野学園周辺に、季

節折々の緑があり、きれいな花が咲き、金木犀も香り、通勤や買い物道中に楽しめます。また行人坂の上からの冬の富士山もかなりいいものです。杉野の学生のファッションも眼を見張るものがありますが（おじさんには若者のセンスは解からないが）、少なくとも私には季節を感じる大きな貴重な要素でもあります。

我が家は、白い犬（レオ、八歳のオス）を飼っていて、朝夕の散歩で境界を歩くことが日課です。朝は、夏は四時、冬は五時頃から散歩に出ます。目黒川沿いと白金方面へのコースと二つのコースを使い分けていますが、ときどき恵比寿・代官山・白金・高輪・五反田へと足を伸ばし、レオも私もリフレッシュ・リラックスしています。ドレメ通り入り口の強い風には、レオもときどきびっくりしています。この愛犬との散歩の甲斐もあって、近所の人たちも私たちに声をかけて頂いたりして、知り合いも多くなりました。

さて、ドレメ通りの私の知っているこの九年間の変遷を振り返ってみますと、気に入っていたサンスーシーというケーキ屋さんが店じまいをしてしまい、その後ちょっと変わった紅茶屋さんができました。そのお

店も消えてしまい、今は不動産屋さんになりました。糸高さん界限は、いつもいい香りがします。アンセルモ教会の周辺は日曜日には国際色が広がり、渋谷状態にもなります。猫がいつもたむろしており、朝早い時間には歩くと猫が何匹も寄ってきます。のどかな雰囲気です。

杉野学園構内は、掃除や整理整頓がされていてきれいですね。学生は毎年卒業入学で変わっていつてしまいます。マナーの悪い人もいますが、若者のエネルギーも感じられます。学園祭も年々バラエティ豊かになっています。男性学生も以前に比べると増えてきました。デザイン学の塚田耕一教授とも親しくさせていただいています。ズボンの語源もフジテレビ「テレビアの泉」ご出演の際に教えていただきました。昔のズボン、足を通してはくときに「ズボくん」という音がしたことに由来することのこと。びっくりですね!!

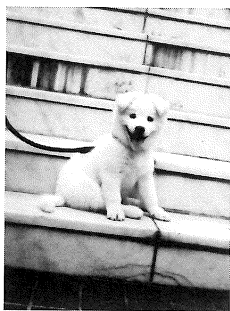
目黒パークマンションの夏の夕顔は、毎年立派に咲いており楽しみの一つです。雅叙園クリニックの鴻田先生と奥様には朝のお散歩のときによくお会いしますが、お二人が毎日なさっている目黒川のお掃除には、ただただ脱帽です。

最近はまだあまり寄っていませんが、喫茶ベアは夕食でお邪魔していました。アップルマーケットも飲食系では大変便利なお店で、私にもまた近隣の方々にも、重要なお店です。ドレメ通りの二十四時間はいつでも誰かが歩いています。

“変化していくことも、変わらないことも重要な歴史です”

“真実は決して一つとは限らない”

夕陽会の方々にも大変親切にして頂いております。これからも皆様よろしくおねがいいたします。



レオ

第4章

資料編

夕陽丘賢人会―健人会

玉木先生が「町会の総会だけでなく、集まる会をしたい」との意向を受けて、町会長はじめ役員の賛同を得て賢人会が発足した。雅叙園観光ホテルで実施されたが、開催日と出席者数は次のようであった。

| | | | |
|--------|--------|-----------|------|
| 第一回賢人会 | 昭和五十五年 | 七月二十六日 | 三十五名 |
| 第二回賢人会 | 昭和五十五年 | 十一月二十六日 | 三十四名 |
| 第三回賢人会 | 昭和五十七年 | 四月二十六日 | 二十八名 |
| 第四回賢人会 | 昭和六十一年 | 十一月二十九日 | 二十三名 |
| 第五回賢人会 | 昭和六十二年 | 十一月二十八日 | 二十一名 |
| 第六回健人会 | 昭和六十三年 | 十一月二十六日 | 二十九名 |
| 第七回健人会 | 平成 | 元年十一月二十七日 | 三十二名 |
| 第八回健人会 | 平成 | 二年十一月十八日 | 二十五名 |
| 第九回健人会 | 平成 | 三年十二月八日 | 二十八名 |
| 第十回健人会 | 平成 | 四年十一月二十七日 | 二十九名 |

